

理科 第3学年 物の重さ 授業の設計図

元にした物：小学校学習指導要領（平成29年告示）の原文と、国立教育政策研究所の学習評価の参考資料。教科書の本文・問題・挿絵は入れていません（先生が入れる欄）。東京書籍の年間指導計画にある「物の重さ」に対応した独自案。教材本文・挿絵・問題文は転載していない。

この単元で子どもが最後にできるようになること

本案で見るのは、児童が「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」に対し、観察結果と考えを区別して答えられるかである。物は形が変わっても重さは変わらず、同じ体積でも物の種類によって重さが違う場合があるというまとめを暗唱できるだけでは、本時の目標に届いたとは判断しない。同じ粘土を丸めたときと広げたときで重さを量り、こぼした分がないか確かめる。体積が同じで材質が異なる物を比較し、形を変えた実験と材質を変えた実験を別の表に記録する。根拠の指し示し方や説明の修正を見ることで、教師は次に何を確かめればよいかを判断できる。

学習指導要領のどこに書いてあるか（原文）

学習指導要領の項目	原文
〔第3学年〕 A物質・エネルギー (1)	(1) 物と重さ 物の性質について、形や体積に着目して、重さを比較しながら調べる活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
〔第3学年〕 A物質・エネルギー (1)ア(7)	(7) 物は、形が変わっても重さは変わらないこと。
〔第3学年〕 A物質・エネルギー (1)ア(1)	(1) 物は、体積が同じでも重さは違うことがあること。
〔第3学年〕 A物質・エネルギー (1)イ	イ 物の形や体積と重さとの関係について追究する中で、差異点や共通点を基に、物の性質についての問題を見いだし、表現すること。

単元の目標

物は形が変わっても重さは変わらず、同じ体積でも物の種類によって重さが違う場合があることを理解し、実物の観察・実験と記録を扱う技能を身に付ける。「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。(A(1))

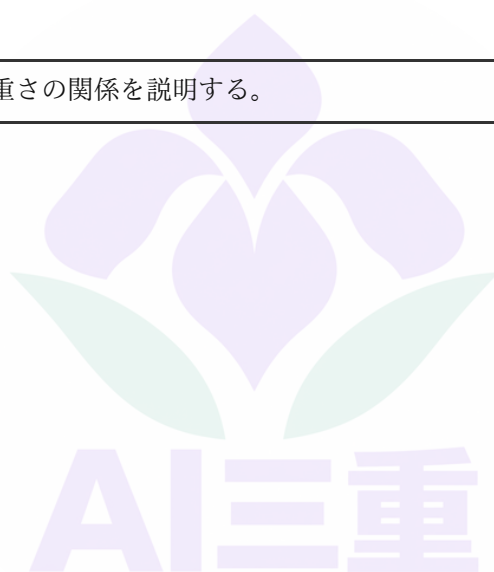
評価規準（3観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①物は形が変わっても重さは変わらず、同じ体積でも物の種類によって重さが違う場合があることを理解している。 ②実物の観察・実験と記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。	①観察した共通点や違いを基に、「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」につながる問題を見いだし、表現している。	①物の重さの学習で生じた疑問について、自分の記録や友達の考えを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

単元の流れ

東京書籍の年間指導計画の配当「6(7)」を参照。全6時間はcatalog収録の標準配当。以下の各次への配分と本時の位置は本資料の授業案であり、出版社の授業配当の転載ではない。学校の年間計画と観察・調査の進み方で調整する。

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○見た目と手応えから重さを予想する。	知①・知②（記録・活動の観察）
第2次	2	○はかりの使い方とゼロを確認する。	知①・知②（記録・活動の観察）
第3次	3	○形を変えた同じ物の重さを比べる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第4次	4	○同じ体積の異なる物の重さを比べる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第5次	5 （本時を含む）	○予想との違いから新しい問題を話す。 ○同じ粘土を丸めたときと広げたときで重さを量り、こぼした分がないか確かめる。体積が同じで材質が異なる物を比較し、形を変えた実験と材質を変えた実験を別の表に記録する。	思①（個人の説明・記録）
第6次	6	○変えた条件と重さの関係を説明する。	態①（記録の見直し・振り返り）



本時の案

本時の目標：観察した共通点や違いを基に、「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」につながる問題を見いだし、表現することができる。

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 (分)	○前時までの記録から「見た目と手応えから重さを予想する」ときの疑問を取り出す。 ○「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」 【めあて】調べた事実を使い、自分の考えと理由を説明しよう。 ○一人で予想と理由を書き、調べたい点を確認する。 〈予想される児童の反応〉 ・物は形が変わっても重さは変わらず、同じ体積でも物の種類によって重さが違う場合があるのか確かめたい。 ・前の記録と比べると違いが見つかりそう。	・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。 ・はかりは水平な場所に置き、最大計量を超えない。ガラスや鋭い金属片を試料に使わず、粘土や安全な材質標本を使う
展開 (分)	○前時までの観察・調査の記録を使う。以下に示す調べ方を振り返り、本時は問いに関係する記録を比較する。追加の実験・調査は方法を計画し、次時に確認する。 ○同じ粘土を丸めたときと広げたときで重さを量り、こぼした分がないか確認する。体積が同じで材質が異なる物を比較し、形を変えた実験と材質を変えた実験を別の表に記録する。 ○「どの観察結果から、そう考えましたか」 ○自分の説明を相手に示し、根拠が同じか違うかを比較する。 ○説明できない記録があれば条件や資料の読み方を確認直す。 ○比べた結果から新たな問題を見いだし、何を調べたいかとその理由を表す。 〈予想される児童の反応〉 ・同じだと思ったが、比べるところをそろえると違いがある。 ・この記録だけではまだ決められない。 ・同じ体積の異なる物の重さを比べることで、理由を確認したい。	・大きく広がったから重いという予想には、量る前後で粘土を足していないことを確認する。ばらした時はすべての部分を一緒に量り、物を置く容器の重さもそろえる ・結果に合わない意見も記録へ戻す材料として取り上げ、発言した児童を責めない。 ・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。 ・本時に単元全体の実験や調査をやり直さない。比較する記録を準備し、方法を確認する必要がある部分だけを実物で示す。 ◎思① 観察した共通点や違いを基に、「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」につながる問題を見いだし、表現している。（個人の記録と説明。交流前後の変更理由を含めて見る。）

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
まとめ (分)	○本時の問いへの答えを、根拠となる観察結果とともに書く。 【まとめ】物は形が変わっても重さは変わらず、同じ体積でも物の種類によって重さが違う場合がある。 ○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。 〈予想される児童の反応〉 ・考えが変わったのは、記録を比べたときに違いを見付けたから。 ・まだ確かめていない条件が残った。	・まとめは得られた記録の範囲に限定する。予定どおりの結果が出なければ条件と方法を見直し、実測結果を作り替えない。 ・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。 ・本時の重点は「比べた結果から新たな問題を見いだし、何を調べたいかとその理由を表す。」であり、知識の結論だけで思考の評価を決めない。 ◎知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

板書の構造

上段に「物の重さ」と本時の問い「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」。左側に予想とその理由、中央に実際に調べた事実の記録、右側に事実から考えた説明を置く。中央は条件・時期・対象が分かる見出しにし、比較する記録を同じ高さに並べる。同じ体積の異なる物の重さを比べる際に用いた記録を残し、根拠と説明を線で結ぶ。下段には確かめられたことと、まだ残る問いを分けて置く。発言の多い子の説明だけで仕上げず、個人の記録の違いを残す。

つまずきやすい所と手当て

大きく広がったから重いという予想には、量る前後で粘土を足していないことを確かめる。ばらした時はすべての部分を一緒に量り、物を置く容器の重さもそろえる

準備するのは、学級で使う実物や資料と、対象・条件・時期を対応させて残せる記録用紙である。教師は事前に資料の出典や器具の働きを確かめ、児童に渡す記録と教師の説明を区別する。はかりは水平な場所に置き、最大計量を超えない。ガラスや鋭い金属片を試料に使わず、粘土や安全な材質標本を使う

本時の評価で説明と根拠が結び付かない場合は、言葉を追加して教え込む前に、比べる対象がそろっているかを見直す。口頭では説明できるが記述が難しい場合は、図と指差しも証拠として残す。

プリントの案

物の重さの問いと記録

上段は「調べたいこと」と「最初の考え・理由」。中央は対象、条件・時期、分かった事実、確かめた方法の欄。同じ粘土を丸めたときと広げたときで重さを量り、こぼした分がないか確かめる。体積が同じで材質が異なる物を比較し、形を変えた実験と材質を変えた実験を別の表に記録する。下段に事実から考えた説明と残った疑問を書く。教材本文・写真は印刷せず、利用できる実物や公的資料の出典を書き入れる。

説明を確かめ直すカード

問い「形を変えたり、同じ体積の別の物に替えたりすると、重さはどうなるだろうか」への自分の答え、根拠の記録、友達の説明との共通点・相違点、修正した箇所と理由の欄を設ける。修正しない場合も根拠を確認した理由を書く。文字を書く代わりに図や口頭説明の記録も使える。

出典：小学校学習指導要領（平成29年告示）。本文は取得済みの文部科学省表V1.2と照合。

（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm）／国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校理科。評価の観点と記録を用いる考え方を参照。事例の文章は転載していない。

（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_rika.pdf）／東京書籍年間指導計画。単元名・配当時数・掲載時期の出典。（https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/rika/data/rika_nenkankeikaku_3_saian.docx）

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)

https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

